



リンゴやブドウなど信州の特産品を販売した「信州復興支援マルシェ」=14日午前10時10分、長野市のJR長野駅

JR長野駅で特産物販売

マルシェで復興支援

台風19号で大きな被害を受けた県内の農業や観光業の復興を支援するイベント「信州復興支援マルシェ」が14日、長野市のJR長野駅で2日間の日程で始まった。リンゴやキノコといった特産物の販売や、県のPRキャラクター「アルクマ」とじゃんけんができるコーナーなどが並び、観光客たちが次々と

千曲川氾濫



作業を終えたボランティアに、すいとんを振る舞うながの農協女性部の部員たち=14日、長野市穂保

ボランティアへ感謝の催し

長野の「農ボラ」最終日

買い求めていた。東京から家族と日帰り旅行で訪れた会社員男性(49)は、元々は10月に旅行を予定していたというが、台風で延期。「2カ月たって、復興の後押しになればと思ってきました」と話し、中野市産のキノコなどを手に取っていた。友人との忘年会のため東京へ向かう途中で立ち寄った長野市栗田の会社員西宮竜也さん(44)は、お土産にリンゴを購入。「信州産のリンゴはみづがたくさん入っていて喜ばれる」と笑顔で話した。15日は午前10時〜午後5時の体験コーナーや、千円以上の購入した人が対象の抽せん会などもある。売り上げは、経費を除き災害義援金として寄付する。

台風19号による千曲川などの氾濫で長野市長沼、豊野地区にたまった泥やごみを撤去する「信州農業再生復興ボランティアプロジェクト」の実行委員会は最終日の14日、拠点としてきた同市穂保の農産物直売所「アグリながめま」でボランティアに感謝する催しを開いた。実行委はおにぎりを振る舞い、ボランティアからは復興に協力し続けたという声が出た。実行委はながの農協(長野市)や県NPOセンター(同市)が中心。ボランティアは14日までに延べ6454人が参加した。リンゴ畑ごみを撤去し、根元の泥をかきだし、積雪期に入ることもあり、15日以降は休止する。催しではながの農協女性部の部員らが、作業を終えたボランティアに地元産野菜を使ったすいとんやリンゴを振る舞い、有志のバンドが演奏を披露。実行委共同代表で同農協組合長の豊田実さん(70)は「復旧はまだ道半ばだが、入り口に立つことができたのは皆さんのおかげ。心より感謝したい」とあいさつした。信州大農学部(上伊那郡南箕輪村)4年の篠原理沙さん(22)はこの日が初参加。泥が付いたまま木に残っているリンゴに驚き「言葉にならない。今後もう少しでも役立ちたい」と話していた。残った泥の片付けなどは、市が業者に委託する。実行委は農作業が始まる来春に向け、今後の支援のあり方を考える。